

学校教育目標	めざす児童の姿（中期的目標）	総合評価
考える子	1 楽しく読む子	本年度は、読みの力の育成、あいさつの定着、外遊びの充実を中心に取り組み、音読や読み聞かせ、児童会活動、環境整備などにより一定の成果が見られた。一方で、読書習慣や自発的なあいさつ、外遊びの二極化など、生活習慣の定着には課題が残る。授業づくりでは視覚支援や学習の見通しの提示が進んだが、実践の徹底にはばらつきがあり、神川スタンダードの共通理解を深める必要がある。 特別支援や個別支援の体制は整いつつあるが、原級での学習が難しい児童への対応や複数教員による支援体制の構築が課題である。家庭・地域との連携では一定の成果があったものの、情報共有や協働体制の強化が求められる。 以上の成果と課題を踏まえ、次年度は朝読書の定着による読みの機会の保障、異学年交流の拡充による人との関わりでの育成、外活動の充実による身体感覚の育成、視覚支援の徹底と共通ツールの活用による学習の見通しの確立など、学校全体で基礎的な力の向上を図る必要がある。
心の美しい子	2 あいさつする子	
たくましい子	3 元気に遊ぶ子	

今年度の重点目標	成果と課題	A	B	C	D	改善策・向上策
① 全ての学びの基盤となる「読みの力」を意識した授業づくり	○音読や読み聞かせ、日本語教室での支援、百人一首など、読みの力を高める取り組みを継続したことで、拾い読みからまとまり読みへ進んだ児童が増え、文章理解が深まる姿も見られた。 ●読みの力には個人差が大きく、読書習慣の定着や、読んで理解し自ら行動する力の育成には課題が残る。		○			・自分で読む機会を増やすため、朝活動に継続的に読書を位置づけ、始業の音楽が鳴ったら、本を開いて読書をする日課とする。
② あいさつを通して心と心をつなぐ活動	○なおよし月間や児童会活動の企画の期間、あいさつができる児童が増え、特に高学年での変化が見られた。 ●あいさつについては、自分から進んで行く児童がまだ少なく、継続的な働きかけが必要である。		○			・異学年交流を増やし、学級以外の友だちや職員と多く関わることで、人との関わりに抵抗感をなくし、相手に対して自ら心を開く環境づくりをする。
③ 遊びを通して体を動かすことを通して、心身の充実をはかる	○休み時間の延長や神川ランドの活用により、外で元気に遊ぶ児童が増えたことも成果である。 ●外遊びについては、外に出る児童と出ない児童の二極化が見られ、基礎的な身体感覚の育成や、教員の関わり方の工夫も求められる。	○				・外活動が好きなきどもたちの良さを生かし、積極的に校外活動を行い、外で歩く、活動する場面づくりを行う。 ・外に出てやってみたくなる遊びコーナーを、さら

領域	対象	評価項目	評価の観点	成果と課題	A	B	C	D	改善策・向上策
学校教育	学習指導	学習の基本	①「神川スタンダード」「学びのユニバーサルデザイン」全学級で大切にする学習の基本の実行	○授業の流れのパターン化や学習内容の提示、視覚支援カードの活用など、児童が見通しをもって学習に取り組める環境づくりができた。 ○図や絵を用いた説明や掲示物の工夫など、UDの考え方も全体として浸透しつつあり、年度当初から研究の方向性に沿った取り組みができた。 ●授業のねらいや振り返りの板書、授業の流れの提示など、視覚支援の徹底にはばらつきが見られ、児童が自力で学習の流れを把握できる段階には至っていない。 ●職員の入れ替わりも多かったことから、神川スタンダードの共通理解を年度当初に再確認する必要がある。 ●「めあて」「まとめ」などの共通マグネット等、全校で使える統一ツールの整備も課題。			○		・視覚支援（授業の流れ・めあて・ふり返し）を進め、児童が自力で学習の見通しをもてるようにする。 ・神川スタンダードの共通理解をし、職員間で実践の方向性を見合う。 ・「めあて」「まとめ」などの全校共通ツール（マグネット等）の利用を改めて確認する。
		学習環境	②「多様な学習形態」ペア・グループ・複数教員・コース別学習等による児童指導 ③「特別支援学級」「かがわ教室」「日本語教室」「ことばの教室」等個に合った学びの場の提供	○②学年合同授業や複数教員による指導、ペア・グループ学習など、児童の実態に応じた柔軟な学習形態が取り入れられ、児童にも職員にも良い刺激となった。●学級の状況によってはグループ活動が成立しにくい場面もあり、コース別学習などの体制づくりには人員配置や学年の実態から課題が残る。 ○③特別支援学級、かがわ教室、日本語教室、ことばの教室など、多様な場を活用しながら、児童が安心して学べる環境づくりが進んだ。また、支援員や担当職員との情報共有も進み、個別支援の質が高まった。●原級での学習が難しい児童が十分に適切な場を利用できていないケースもあり、保護者との連携や支援体制の強化が必要である。また、特性のある児童が増えている現状では、複数教員によるフォロー体制の構築が今後の課題。		○			・引き続き、学年・支援員・担当職員によるミニケース会議を行い、必要な場につながりやすくする。併せて、保護者への説明や情報提供を充実させ、支援の理解と協力を得やすくする。
		「読みの力」の向上	④「読みの力」を意識した授業づくり ⑤日々の読書活動と音読活動の充実	○「読みの力」を意識した授業づくりでは、国語を中心に音読の機会を増やしたり、語彙を広げる活動を取り入れたりと、読むことに親しみ環境づくりが進んだ。また、読み聞かせや読みたくなる教材の工夫により、意欲的に読みへ向かう児童も見られた。 ○日々の読書活動では、図書館利用や読書時間の確保、音読宿題の継続等、読む機会を日常的に確保できた。 ●読書活動には児童間で大きな偏りがあり、全員が集中して読書に向かう姿には課題が残る。 ●音読が苦手な児童も多く、宿題としての定着が十分でない。 ●授業の中で十分な音読の時間を確保することが難しい場面もあり、児童自身が読む機会をさらに保障する必要がある。音読の方法や量についても教員側で手探りの部分があり、読みの力を育てるための授業構成や指導法の工夫が今後の課題。			○		・朝読書を全学級で大切に静かに読む時間を安定して確保する。読書に抵抗のある児童には、文量が多すぎない本、写真・図入りの本など「入りやすい本を紹介できるよう、担任と図書館司書職員が連携する。
		その他	⑥スタートカリキュラム、MIM、小中連携による「小1の壁」「中1の壁」の最小化 ⑦教科の枠を超え、学年のつながりを大切にした「メディア教育」「安全教育」「性教育」の推進	○スタートカリキュラムの活用により、幼保からの活動の連続性を意識した授業づくりが進み、小1の壁の最小化に向けた取り組みが行われた。 ○学年で共通の活動や授業が増え、学年としてのまとまりが深まった。 ○MIMを継続して実施し、児童の実態把握に役立てることができた。 ○安全教育については、日常的な声かけや学年集会を通して意識づけが進んだ。 ●MIMの結果を授業改善に十分生かされず、下位生への具体的な支援方法の検討が課題として残る。 ●保育園、幼稚園からの情報不足や中学体験への参加率の低さ等、幼保小・小中連携の面で改善の余地がある。 ●メディア教育・安全教育・性教育については、計画的・体系的な実施が十分でなく、学んだことを日常生活で実践する段階には至っていない。全校的な統一感をもった取り組みの構築が今後の課題。			○		・家庭と連携し、児童が自分のメディア利用を見直す機会をつくり、自己管理力の定着を図る。 ・学級では、短時間の振り返りを行い、個々の目標を再確認する。 ・アンケートフォーム等を活用し、家庭でのメディア利用の工夫例を収集・紹介することで、保護者同士の情報共有を促す。PTA常任委員会では、寄せられた意見や課題を共有し、無理のない協力を呼びかける等、家庭との連携を試みる。※
学校教育	生活指導	あいさつが響き合う学校	⑧あいさつの励行。目を見てあいさつが広がる学校づくり ⑨児童会活動とタイアップしたあいさつ活動の実施	○あいさつの励行については、なおよし月間や人権月間の取り組みを通して、あいさつを意識する児童が増え、人権標語にも「あいさつ」をテーマにした作品が多く見られるなど、意識の高まりが見られた。 ○6年生が率先してあいさつする姿が見られ、上級生が手本となる動きが広がっている。 ○児童会の企画がある期間には、あいさつが活性化するなど、活動の効果も確認できた。 ●自分からあいさつできる児童はまだ少なく、朝のあいさつが返らない日もあるなど、日常的な定着が課題。 ●学級内ではできて、学級・学年を越えたとあいさつが弱くなる傾向がある。日常の中で自然にあいさつが広がる環境づくりが今後の課題。			○		朝や帰り以外の場面でも自然にあいさつができるよう、次のような活動を重点的に行う。 ・「こんにちは」や会釈など、場面に応じたあいさつの仕方を学ぶ。 ・学級、学年枠を越えた交流の機会を増やし、誰に対しても安心してあいさつできる雰囲気づくりを行う。 ・職員も引き続き積極的にあいさつを行い、学校全体で温かい雰囲気づくりを進める。
		学級づくり・仲間づくり	⑩休み時間の延長。多様な遊び場づくり。 ⑪「神川っ子」や「スーパー神川っ子」で学年を越えた交流 ⑫「児童理解の時間」やスクールカウンセラーとの連携による子ども理解 ⑬「学びのとびら」「神川ギャラリー」「神川小展覧会」各学年の活動・作品を紹介する場づくり ⑭相談ウィーク（年3回）による情報の共有	○学級づくり・仲間づくり・子ども理解については、異学年交流や遊びの時間の工夫などを通して、子ども同士の関係づくりが進んだ。 ○相談ウィークや、休み時間の遊び、日常の会話を通して、子どもの願いや悩みを知るなど、職員の日常的な関わりを学級づくりに生かすことができた。 ○「スーパー神川っ子」など学校全体の取り組みが定着し、仲間づくりの文化が育ちつつある。 ●児童理解の情報共有については、学年・学級を越えた情報の流れが十分ではない。 ●「学びのとびら」「神川ギャラリー」「神川小展覧会」各学年の活動・作品を紹介する場づくりや相談ウィークなど、活動の計画性や継続性にも改善の余地がある。 ●異学年交流は価値が高いが、機会が限定的であり、無理のない範囲での継続的な取り組みが必要。 ●児童理解が個人の努力に依存しがちなため、グループでの検討や職員間の協働による支援体制の強化が今後の課題。		○			・無理なくできるペア学年や連学年学習や活動を、継続的に、または、断続的でも何度か取り組み、来年度に向けた異学年交流の素地をつくります。
		子ども理解							
学校教育	家庭との連携	家庭との関わりPTA活動	⑮個別懇談会年2回による情報の共有 ⑯各家庭でのルールを明確にしたメディアコントロール ⑰学級懇談会の充実 ⑱保護者の負担軽減を意識した時代に合わせたPTA活動	○家庭との関わりについては、個別懇談会や学級懇談会を通して保護者と子どもの様子を共有する機会が確保され、学校と家庭が連携して支援する基盤が整いつつある。 ○保護者の負担軽減を意識したPTA活動の工夫や、学校全体の取り組みを通じた情報発信は、保護者とのつながりを深める一つとなっている。 ●児童理解に関する情報共有には課題が残り、学年・学級を越えた情報の流れが十分ではない。 ●家庭でのメディアコントロールは家庭差が大きく、学校の働きかけが十分に浸透していない。 ●学級懇談会やPTA活動についても、計画性や方向性の明確化が必要であり、家庭と学校がより協働できる仕組みづくりが今後の課題。			○		
		地域とつながる奉仕・交流活動	⑲「国分寺史跡公園全校清掃」「上田養護学校との交流」等地域とつながる活動 ⑳神川ボランティアや見守り隊との連携 ㉑地域の方から学ぶ、多様なクラブ活動 ㉒神川に学ぶ「ふるさと学習」の継続と深化	○地域とつながる奉仕・交流活動では、国分寺史跡公園全校清掃や上田養護学校との交流を通して、子どもたちが主体的に活動したり、様々な方々と関わることができた。 ○クラブ活動では全クラブに地域講師が関わり、子どもたちが多様な専門性に触れる貴重な機会となった。 ○田んぼの学習など、ふるさと神川の自然や文化に学ぶ活動も継続して行われ、地域に根ざした学びが深まった。 ●地域とのつながりを視覚的に整理する仕組みが不足しており、活動の全体像が共有しにくい。 ●ボランティアや地域講師との連絡調整が職員に集中しているため、外部のコーディネート機能が確立するとより良い。 ●形式化された活動は実施できているものの、交流の継続性や新たな活動について、今後は地域と学校がより協働できる体制づくりが必要。			○		・各学級ごと、今年度の地域学習、地域活動のまとめを行い、次年度につなげたり、次年度の参考にしたりにできるようにする。 ・来年度の地域連携体制の充実に向けて、地域と継続的に関わりのある方々の中から、地域コーディネーターとしてご相談をお願いできる方を探り、関心やお考えを伺う機会を設けていく。
		職員研修	㉓・授業改善・地域学習・人権教育・ICT教育の充実	○各係が中心となって多様な研修を企画・実施し、職員が学び合う機会がもつことができた。 ○特別支援教育コーディネーターによる特別支援教育研修や、ICT支援員によるICT研修など、実践に役立つ内容も多く、研修を通して授業改善や支援の質の向上につながった。職員間で学びを共有し、学校全体で取り組みを深めることができた。 ●行事や学級対応に追われ、研修内容を授業に生かし切れないという課題がある。特に、子どもの問いを生かした授業づくりや、特別支援・ICTの活用については、実践に落とし込む時間的余裕が不足している。 ●研修の日程や運営方法についても見直しが必要であり、研修を継続的・体系的に深めるための仕組みづくりが今後の課題。		○			・職員の専門性を生かした、短時間のミニ研修を行う機会をつくり、無理なく、必要な研修ができるようにする。

○ 評価基準 A・・・達成できた B・・・おおむね達成できた C・・・やや達成できなかった D・・・達成できなかった